

はしがき

本書は、大学生が将来的に国際人として活躍できるために、国際社会のなかで生き抜くために必要な知識を学び、理解し、国際感覚を磨くことができるように企画したものです。

現在、日本にいる者は（国籍を問わず）一個人としても、集団としても、否応なく国際社会のなかで、世界の動向に、地球規模の動きのなかに巻き込まれています。そのことを認識しながら考え、行動しなければならないことにかんがみ、学生が国際学を学ぶ手がかりを示したいと考えました。英語、中国語、日本語等による国際コミュニケーション、言語と国際社会、言語のグローバル化、地域理解と国際社会との関係、国家とグローバリゼーション、人権などの人間性と国家やグローバリゼーション、文化の価値とその流通、個人と国家と移動、そして国際関係・国際交流、文化とその価値をめぐる社会的関係を考慮に入れた国際的な教養を学ぶ手がかりを得ることを目的として、編集しました。

ところで、2015（平成27）年の正月のことです。日本に生まれ育った大阪のひとは、想像できたでしょうか。大阪の中心部、道頓堀や心斎橋で買い物をしている人の7～8割が外国人でした。中国語、台湾語、韓国語、ベトナム語、インドネシア語など日本語以外の言葉が飛び交っていたのです。国際交流が盛んになっていることを実感してしまいます。2014（平成26）年度の訪日旅行客数が200万人を超えたこともそれを示すものでしょう。

また、日本の新年の風物詩である「初売り」にヨーロッパから少女たちが来て、多数、初買いをしているニュースが流れました。そこでは日本アニメの服装で買い物をしていました。「クール・ジャパン」の影響でしょうか。日本文化が世界へと広がっている影響でしょうか。日本という「地域」の文化がグローバルな広がりを見せているのです。このような国際化をみるにつけても、いまや、国際的な知識や感覚、感性を修得することは必須であり、国際教養は必要不可欠の知識となってきたことを痛感します。

国際という言葉が使われる前、明治時代には「万国」という言葉が使われました。万国博覧会にその名残があります。それがのちに、同じような意味として「国際」という言葉が、すり替わるように使われるようになりました。そして現在では、国際とともに、グローバルという言葉も使われるようになってきました。

グローバリゼーションによる均質な地球「村」にむけた動向はよいことももたらしましたが、弊害もまた大きなものがありました。その功罪を明らかにするためにも、実際には国家や地域社会が1つの単位となって世界が動いていることを把握する必要があります。

またグローバリゼーションについてみると、ある「地域」の技術や製品や制度や様式などが、他の地域に広まり、国家の枠組みに関係なく広がる現象であることもあります。それは、ある特定の特徴を持ったものが、関係諸地域における特徴や特性を変容させながら変形させていくことでもあります。しかしその場合には、現地に接触すると、そこで生じる相互作用によって、さまざまな変化が生じることがあります。グローバリゼーションは、国家や地域と人間などとの相互作用のなかに定着すること、影響を及ぼすことを忘れてはいけません。地域や人間の織りなす生活文化が、新たな価値を生み、世界とつながっていることを想起すべきです。

このような認識のもと、本書では学生たちが考え、検討し、何らかのこれからの指針なりを見出すために必要な情報を提供したいと考えました。しかし、結果としてそれにとどまらず、広く国際社会のことや国際学に興味を持つ人々にも役立つ書物になりました。現代の東南アジア、東アジア、ムスリムの世界（イスラーム世界）、アフリカ、そして移動する「動いている自分」（ある意味では no place）という「世界」などを補うものはほとんど見当たりません。その点では、テキストとして利用するだけにとどまらず、資料として、また新たな視点を得るきっかけとして、活用していただければ幸いです。

このように、境域を越えるものになったのも、ひとえにご寄稿して下さった諸先生方のご協力の賜物であると感謝しています。執筆者としては、大阪国際大学の非常勤講師・学部や学科の講演会を引き受けて下さった諸先生方、そして日頃お世話になっている諸先生方にもお声がけさせていただきました。

快く応じてくださり心より感謝しています。

本書作成にあたり、大阪国際大学の理事長、学長をはじめ、教職員の皆様にはもちろんのこと、執筆してくださった諸先生方には深謝申し上げます。今回原稿をいただく予定にしていた先生方もおりましたが、種々の制約もあり、今回は、そのお志のみいただいたこともありました。さまざまな形でご協力くださった方々全員に感謝申し上げたいと思います。

最後になりましたが、本書の出版を引き受けていただき、本書作成に多大なる労力を惜しまずご尽力くださった法律文化社の小西英央氏、上田哲平氏には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

2015年3月

編者を代表して 佐島 隆